

頂妙寺版法華經の成立（その一）

田 島 毓 堂

0. はじめに

以前私は本稿と同題で、小文を書いたことがある⁽¹⁾。以来気にかかりながら放置してきた問題である。当時の調査資料はもう手元にはない。新たにこの問題を取り上げ、調査し直してみたいと思う。

頂妙寺版の盛行は江戸時代以来である。木版の時代はどれだけ印刷すると版が摩滅するのか、専門家に聞いてもなかなか正確なことは分からないが、天保五年1834の初版本は間もなく摩滅し、その間、その渴をいやすために「妙満寺版」が日晶によって開版されている（その開版年月は不明だが初版と文久版の間だと思われる）。頂妙寺版自体も文久二年1862に復刻されている。これは、内容は殆ど初版と同じで「かぶせぼり」かと思われる。明治になって、この訓点について異議を唱え、頂妙寺水野日顕師が改訓版を公刊している。このことは、明治版跋文に見られるとおりである。さらに、布施皓岳師によって再び改訓されて昭和四十年代になって新頂妙寺版が公刊され、今日に至っている。

現在多く見られるのは、新頂妙寺版ではなくて、明治版を元にしたものである。銅版により、多数の印刷がなされている。小本と中型本が見られる。

ただ、頂妙寺版の目的は、必ずしも明確ではない。明治改訓、昭和の改訓とも、その訓読を問題にしているから、その目的はその訓点にあると思われる。頂妙寺版は、その訓点に確かに特長がある。本来はその用に供せられたものなのであろう。しかし、現在多数流布しているのは、必ずしも訓読のために用いられるためのものではないようである。その、本の様子からは、初心者の音読用には不便である。又、斉唱するとすれば、これによって訓読の斉唱は出来ない。単に法華經のテキストに対する要求を満たすために求められるかも知れない。現在、古本や洋本仕立ての物を除き、折り本で法華經八巻全体を揃えるのは割合難しい。本来はやはり法華經訓読ということが目指されたのだと思われるが、このように法華經一部八巻を揃えるに便利だということも大いに普及している一つの理由だと思われる。しかし、頂妙寺版の本来の目的は的確に指摘することは困難だが、そのようなことではなかったと考えられる。頂妙寺版の成立を考えるなかで、その点も考察していこうと思う。

頂妙寺版法華經そのものがどういう目的で使われるかはともかくとして、頂妙寺版の訓点は

後世の訓読に大きな影響を与えている。現在流布している多くの法華経訓読文は、頂妙寺版以外から出ているものを探す方が困難なくらいである。しかし、その頂妙寺版がどのように成立したかは、はっきりしていない。本稿を通じて、その一部についてはあるが、それを明らかにしたいと思う。

1. 日遠上人「文段法華経」と『法華経為為章』

先の調査では、日遠上人1572-1642撰の「文段法華経」（文段経）（慶長17年1612識語）との深い関係を指摘した。それは主としてその中の為字の扱いからであった⁽²⁾。法華経中の為字については特別な関心が持たれていた。それは、慈恩大師窺基632-682撰『法華経為為章』⁽³⁾という専書があることでも知られる。為為章の「為字訓」は日本の法華経訓読に大きな影響を与えている。すでに、平安時代の古訓点本にそれを見ることが出来る⁽⁴⁾。中世にはこの為字訓による訓読は影を潜めていたが、調査が進むにつれて為字訓による訓読も知られるようになった⁽⁵⁾。近世初期、「法華三大部補注」によって、為字訓を復活させたのが、日遠上人の「文段法華経」と「法華訳和尋跡抄」（元和7年1622成・寛文9年1669刊）であった。但し、日遠上人は『法華経為為章』の名は挙げず、「補注」（法華三大部補注）に依っている。もっとも、この「法華三大部補注」のなかの為字訓は『法華経為為章』によるものである。為為章は後、西来寺宗淵上人の「山家本法華経裏書」に再び姿を現している。この、為為章による為字訓が為字の訓読に影響を与え、為字和訓に独特の性格を与えている。それ故、為字の和訓を見るだけでかなりその訓読の系譜が彷彿できるのである⁽⁶⁾。その、為字和訓から見て、頂妙寺版は日遠上人の「文段法華経」ときわめて近い関係にあるのである。本稿は、基本的それを確認することになると思う。

2. 本稿の資料

既に本稿の枠組みもひょっとしたら結論までも述べてしまったかも知れない。以下、それを子細にデータをそろえて確認していこうと思う。誠に迂遠きわまりない作業である。大枠だけで満足される方は、以下は省略し、前項だけをお読みいただければいいと思う。一言先に申し上げておく。

頂妙寺版は、天保5年刊の初版本による。前述のように、頂妙寺版には、初版及びその復刻＝文久版、明治版、昭和版があるが本稿の目的は頂妙寺版そのものがどのようにしてできあがったかを知るためだからである。文段経は、本満寺から昭和48年1月複製刊行されたものによる。文段経は刊本に2種類あると言われる。現に、立正大学図書館蔵の日董手沢の刊本と少しずつ

違っている。必要があればそれについても注意する。立正大学図書館には日遠上人自筆本もあるが、刊本の方によることとする。これも、必要があれば参照する。

対照する資料として、江戸時代に多数出版された「両点本」を用いようと思うが、これは、多数あると同時に、その出版に関する事が殆ど分からない。出版は頂妙寺版より後にはなるが、その出版年月日等の明らかな、万延二年平楽寺書店刊の『妙法蓮華經改正新版
両点句読』に依る。但し、本稿では、そこまで、言及する余裕はない。後稿にそれを果たそうと思う。

3. 比較対照の項目

頂妙寺版初版を見ると、漢文の本文のほかに諸種の要素がある。それは、

1. レ点・一二点・上中下点等の返り点。
2. 字の右下（句点）、あるいは真下（読点）の圏点
3. 字の左上（本濁）・左下（新濁）の濁点。
4. 字の中央の音合符。
5. 字の左の訓符・訓合符。
6. 字の右の音読符。
7. 原則として、字の右の振り仮名・送り仮名・迎え仮名・捨て仮名・助詞・助動詞及び若干の読み添え語。
8. その他、頂妙寺版にはないが、文段経にある為字訓も為字和訓との関係で注目する。

以上、一括して句読訓点と言われるものが比較の対象項目である。

一方、文段経には多数の注記注解が存在する。又、今回資料とする本満寺刊の複製本には所持者の書き入れも多数ある。これらこそが、文段経の中心をなすものであるが、頂妙寺版の内容に関係しないので、今回の調査では、訓点・訓読に関わるものだけを取り上げ、それ以外については一々言及しない。

文段経には何があるか。繰り返しのようだが、頂妙寺版と対照して掲げておく。

1. レ点・一二点・上中下点等の返り点…文段経にもあり。
2. 字の右下（句点）、あるいは真下（読点）の圏点…一部、朱。少ない。
3. 字の左上（本濁）・左下（新濁）の濁点…一部朱濁点。少ない。
4. 字の中央の音符号…一部に見られるが少ない。
5. 字の左の訓符・訓合符…少数であるが、有る。
6. 字の右の音読符…少数であるが、有る。
7. 原則として、字の右の①振り仮名・②送り仮名・③迎え仮名・④捨て仮名・⑤助詞・助動詞・⑥敬語・⑦読み添え語…文段経にもあり

8. その他、文段経には訓読に関係したものとして、為字訓がある。

以上の内、比較対象としては1と7が肝心である。2と3と4は頂妙寺版にとっては重要な添加であるが、文段経と比較するには、差異ばかりになり、余り意味を持たない。5はともに若干見られる物であり、振り仮名・捨て仮名とも関連する。6は5ほど訓読に関わらないが注意しておく。8も和訓との関係で注意すべきである。

結局、1・5・6・7を中心に対照していく。大雑把なことは既に分かっている。本稿では、逐一対照して、愚直に確実に調べる。本稿では、時間的・分量的制約のため、法華経の巻第一の序品のみについて、その調査結果を見ていく。以下については、続稿を用意する。又、前述のごとく、文段経と、頂妙寺版の関係を裏側から補強する両点本との対照も後稿にゆだねる。

4. 文段経と頂妙寺版初版の訓点

以下、前項に示した各項目について、順に見ていく。

まず、序品は長行2281字、偈文1892字、丁数は49半折、標題1行を合わせ、244行ある（以下所在を示す必要がある時は5行半折毎に通し番号を付け、2-5、15-3のように示す）。

前項の項目中、2・3・4を除いて3049の比較箇所がある。1. 返り点は、470箇所、5. 訓読・訓合符は361箇所、6. 音読・音合符は70箇所、7. 仮名付訓等は2125箇所、8. 為字訓は23箇所である。文段経との異同について、項目毎に述べる。

4. 1 返り点

全部で470箇所にある。うち、両者ともかくも一致するのが454箇所、あとの16箇所は一方のみにあるのが4箇所、両者不一致が8箇所、12の異同がある。

4. 1. 1 一方のみにある返り点

1. 如_レ是我聞（是ノ如キヲ我レ聞キ、）1-2〔以下必要なときは、レ点はレ、一二点は1、2、上中下点はウ・チ・ケで示すこととする〕

序品冒頭である。文段経ではここにレ点がない。他では、「如是」にはレ点が付されているのに、冒頭でないのは少し不思議な感じがする。自筆本にはレ点がある。日董本は手書きで加えてあるところを見ると版本では落としてしまったものと思われる。他の箇所には「如是」にきちんと返り点が付けられている。次の通りである。

如_レ是2-5、如_レ是衆多18-4、如_レ是等施種種微妙24-2、亦復如_レ是28-5、如_レ是31-1

2. 不起₂于座₁（座ヲ起チ下ハ不ス）36-2
これは、頂妙寺版で、必要なレ点を欠き、文段経にはある例である。文久版にはあり、明治版にも補われている。

3. 令₂衆歡喜₁已（衆ヲ令シテ歡喜セ令メ已テ）45-2
4. 當₂見₂無数佛₁（當ニ無数ノ佛ヲ見上ル當シ）47-2

この2例は、本満寺本文段経にレ点が見られない。「令」の字については返り点の付け方がきちんと定まっていないうに見受けられるが、日遠自筆本にはこの両者ともレ点があるが、日董本にはない。刊本が刻し忘れたものであろう。

4. 1. 2 両者に異同のあるもの

8箇所の本文に次のような異同がある。

1. 不₂周遍₁（周遍セ不ルコト靡ナシ11-3）
二点のみ一致するが、文段経には一点が無い。日董本にもない。自筆本にはあるので、版本が落としたものである。

2. 攝₂念山林億千萬歳（念ヲ山林ニ攝テ億千満歳 23-2 文：一二点）
（念ヲ攝メ山林ニシテ億千満歳 23-2 頂：レ点）

この例は、文段経と頂妙寺版は読み方が異なる。文段経は、「念を山林に撮めて億千萬歳以て佛道を求を見る」となり、頂妙寺版は「念を撮め山林に億千万歳以て佛道を求を見る」、意味は殆ど変わらない。軽々には言えないが、文段経の読みの方が優れているように思う。返り点の付け方に不一致のある一例である。

3. 又有₃菩薩…供₂養舍利₁（又菩薩ノ…舍利ヲ供養スル有リ 25-1 頂：一二三点）
これは読み方に違いはないが、返り点が、頂妙寺版は一二三点、文段経は「上中下点」になっている。これは、頂妙寺版の付け方が普通である。

4. 如₂天樹王其華開敷₁（天ノ樹王ノ其ノ華開敷スルカ如シ 26-2 頂：一二点、文：上下点）

この例も前項と同じく、文段経上下点は不要、頂妙寺版の一二点で十分である。

5. 欲₂令₃衆生咸得₂聞₂知₂…難信之法₁故（衆生ヲシテ咸ク…難信ノ法ヲ聞知スルコトヲ得エ令メント欲オホスカ故ニ 29-1 文：一二三四五点）

頂妙寺版の二つのレ点が、文段経では三と五になり、一から五までである。頂妙寺版が直したのであろう。

6. 教化令₃其堅₂固…菩提₁（教化シテ其ヲシテ…ニ堅固ナラ令ム 38-3）

これは3. 4. と同様、文段経では一二三点が上中下点になっている。

7. 當₂說₃大乘經名₂…護念₁（當ニ大乘經ノ…護念ト名ルヲ說フ當シ 40-2）

佛（彼佛・今佛を含む）47 諸（是諸・及諸を含む）44 又（又同を含む）21 時（是時・一時・爾時を含む）16 今（我今・今佛・今則・今者を含む）13 俱14 復（亦復・倍復を含む）14 爾（爾時を含む）14 是（是諸・是時・皆是レ・汝是・是人を含む）14 已（已曾を含む）13 各11 皆（皆同・皆能・皆是レを含む）10 光（此光・斯光を含む）9 其数（其・其声・其心・其ノ名を含む）9 心（之心・其心・心常・若心を含む）5 亦（亦復を含む）7 若（若・若身・若心・我若を含む）6中6 或6 即（即授・尋即を含む）6 汝（唯汝・汝是・汝身・汝等を含む）6 人（若人・是人・異人を含む）6 我（我身・我若・我等・我今を含む）6 後（其後を含む）4

これだけで、308箇所になる。また、訓読符と振り仮名等が同居するものも見られる。総じて、頂妙寺版は間違いなく読めるように、文字の一つ一つに至るまで、音読なのか、訓読なのかまで示しているといえることができる。

4. 3 音読符

全部で70箇所にある。共通が8箇所、文段経のみが2箇所、頂妙寺版のみが60箇所である。やはり、読み方に細心の注意を払っている様子がここからもうかがえる。

共通する8箇所は、「慈・度・主・人・幢・衆・等・事」の字に付いており、文段経独自の2例は「観スル諸-法性ハ」（24-4）の「観」と「普-佛-世-界」（33-5）の「普」で、頂妙寺版は前者はスルが付いていて音読であることが分かるし、後者は音符号が付いていて音読であることは示されている（この漢字の中心にある音符号は今回調査の対象にしなかった）。

頂妙寺版60箇所は、次の字に付いている。

衆8・等5・瑞5・念4・事3・義3・本2・度2・人2・施2・散2（以上11字、数字は箇所数）

以下の22字は、各1箇所である。偈・會・六・八・二・道・動・尊・像・僧・生・七・四・三・座・五・苦・記・戒・縁・一・安

わざわざ音読符を付ける理由がほぼ推定できる。「衆・念・本・人・施」などは音読も訓読もあるので特に注意しているのだろう。

以上の2項目の訓読・音読については、頂妙寺版の方に圧倒的に多く文段経との関係はわずかな一致を見るだけであるが、その中でも深い関係が見て取れた。

4. 4 付訓等

これはいろいろの項目に分けられる。両者一致するもの、両者の訓不一致のもの、一方で増加するもの、併せて2125項目ある。

このうち、両者一致するのは1819所（85.2%）、両者の訓が一致しないのは9箇所18項目

(0.8%)、文段経に多い部分43箇所(2.0%)、頂妙寺版で増加する部分245箇所(11.5%)である。それぞれの内容について述べる。

4. 4. 1 一致する部分

上記の通り、8割5分以上が一致する。一致の内容は、①振り仮名の一致62箇所、②送り仮名の一致645箇所、③迎え仮名の一致5箇所(内1例、捨て仮名も含む)、④捨て仮名の一致18箇所(内2例助辞を含む)、⑤助辞(助動詞、助詞を合わせて助辞と称しておく)全1037箇所(この内、助辞1つだけのもの968箇所、他は、2つ以上の助辞の組み合わせ、送り仮名と助辞、助辞と読み添え語、敬語と助辞、等69箇所)、⑥敬語39箇所(内5箇所は読み添え語を含む)、⑦読み添え語13箇所(他に5箇所敬語を含むものあり)である。但し、上記は、たとえば、一箇所でも2項目が含まれている場合、そのどちらかに算入している。余り細かいことはどうでもいいかもしれないが、念のために言えば、①62、②647、③9、④19、⑤1193、⑥73、⑦51、計2054項目になる。一例ずつ表示しておく(「一致の内容」の数字は上掲の数字、「備考」はそれを具体的に示したもの)。

内容	一致の内容	備考	訓読	所在
與ト	①	振り仮名	眷屬六千人與ト俱ナリ	3-1
合シメ	①+②	振り+送り	人ヲシテ聞ント楽ハ合シメ	17-3
為サタメテ	①+②+⑤	振り+送り+助詞	為サダメテ此レヲ説ントヤ欲オホス	27-3
所可トコロノ	①+⑤	振り+助詞	説フ所可トコロノ法	31-4
觀ミ上ル	①+⑥	振り+敬語	歡喜シ合掌シテ一心ニ佛ヲ觀ミ上ル	11-2
得エ下フト	①+⑥+⑤	振り+敬語+助詞	父出家シテ…ヲ得エフト聞イテ	32-3
厭アクト	①+⑦	振り+語	歡喜シ厭アクト無シテ	24-2
當シ	②	送り仮名	當ニ知ル當シ	35-1
聞キ、	②+⑤	送り+助動詞	是ノ如キヲ我レ聞キ、	1-2
開敷セルガ	②+⑤+⑤	送り+助動詞+助詞	天ノ樹王ノ其ノ華開敷スルカ如シ	26-2
現シ下フ	②+⑥	送り+敬語	世尊神變ノ相ヲ現シ下フ	13-1
開悟セシメ下(フ)ヲ	②+⑥+⑤	送り+敬語+助詞	又諸佛…衆生ヲ開悟セシメ下フヲ觀ミル	17-4
高妙ニシテ	②+⑦	助動詞+助詞	寶塔高妙ニシテ	25-3
聞知スルコトヲ	②+⑦+⑤	送り+語+助詞	衆生ヲシテ咸ク…聞知スルコトヲ得エ令メント欲オホスカ	29-1
見聞スルコト	②+⑧	送り+語	見聞スルコトスノ若ク	18-3
所ミ(モ)ト	③	迎え仮名	諸仏ノ所ミ(モ)トニ於テ	4-1
言イク	③+②	迎え+送り	文殊師利ニ問テ言イク	14-5
在マーシテ	③+②+⑤	迎え+送り+助詞	世尊大衆ニ在マーシテ	43-1
上ミーヘ	③+④	迎え+捨て	佛ノ上ミーヘ及ヒ諸ノ大衆ニ散ジ	10-3
復タ	④	捨て仮名	已ニ盡シテ復タ煩惱無ク	1-4
者(モ)ノハ	④+⑤	捨て+助詞	其ノ最後ニ成仏シ下フ者モノハ	38-5
柔軟ノ	⑤	敬語	柔軟ノ音ミーヲ出シテ	17-2
令(メ)ント	⑤+⑤	助動詞+助詞	衆生ヲシテ咸ク…聞知スルコトヲ得エ令メント欲オホスカ	29-1
因縁ヲ以シ	⑤+⑦	助詞+読み添え語	種種ノ因縁ヲ以シ	17-4
未曾有ナルコトヲ	⑤+⑦+⑤	助動詞+語+助詞	未曾有ナルコトヲ得テ	11-2
照(シ)下フ	⑥	敬語	白毫ノ大光普ク照シ下フ	15-4
讚(メ)上ルヲ	⑥+②	敬語+助詞	又菩薩ノ…諸法ノ王ヲ讚メ上ルヲ見ル	21-2
問上テ	⑥+⑤	敬語+助詞	能ク諸佛ニ問上テ	21-3
見(ミ)上リシニ	⑥+⑤+⑤	敬語+助動詞+助詞	曾テ此ノ瑞ヲ見ミ上リシニ	28-4
教(ヘ)下フコト	⑥+⑦	敬語+読み添え語	諸ノ菩薩ヲ教ヘ下フコト	17-2
値上ルコトヲ	⑥+⑦+⑤	敬語+読み添え語+助詞	無量…萬億諸佛ニ値上ルコトヲ得テ	39-3
八万人アリ	⑦	読み添え語	八万人アリ	3-3
華蓋アルト	⑦+⑤	読み添え語+助詞	欄楯華蓋アルト軒飾トヲ布施スル	19-4

4. 4. 2 不一致箇所

9箇所ある。どういう風に変化しているのか、その全例を示す。

1. 無ク	已ニ盡シテ復タ煩惱無ク	1-4
無シ	已ニ盡シテ復タ煩惱無シ	1-4
2. 修オサメ	慈ヲ以テ身ヲ修オサメ	4-1
修シテ	慈ヲ以テ身ヲ修シテ	4-1
3. 四ツノ	四ツノ迦楼羅王有リ	8-4
四リ	四リ迦楼羅王有リ	8-4
4. 照 _下 フニ	東方万八千ノ世界ヲ照 _下 フニ	11-3
照 _下 ヒ	東方万八千ノ世界ヲ照 _下 ヒ	11-3
5. 修行シ	優婆夷ノ諸ノ修行シ	12-2
修行アテ	優婆夷ノ諸ノ修行アテ	12-2
6. 欲ホシ	自疑ヲ決セント欲ホシ	14-3
欲ル	自疑ヲ決セント欲ル	14-3
7. 故ソ	何ンカ故ソ	15-4
故ニ	何ンカ故ニ	15-4
8. 無ク	威儀欠カクルコト無ク	22-3
無シテ	威儀欠カクルコト無シテ	22-3
9. 山林ニシテ	念ヲ攝メ山林ニシテ億千満歳	23-2
山林ニ	念ヲ山林ニ攝テ億千満歳	23-2

（上段が頂妙寺版、下段が文段経）

この中の、9はすでに返り点の付け方の相違の箇所で触れたものである。これは、既述のごとくいずれがいいのかにはわかには言えない。1はここで切るか、続けるかで、これまた可否を言いかねる。2は音読であったのを訓読にしたもので、その分かりやすくなっている。3は文段経の訓点の付け誤り。「有」に二点を付けるべき所、「四」に二点を付けてしまった。「リ」も「有」の送り仮名であろう。4も文意は頂妙寺版の訓読が勝る。5は頂妙寺版の読みが自然だろう。6は文段経はうまく読めない。「欲する」と読むのだろうか。それならば文法的には正しくない。頂妙寺版はホとシの間が開いているが、「欲し（ほっし）」と読ませるのだろうか。7はどちらでも通じる。ただ、「何が故ぞ」の方が、ここでは優れた読み方である。8も「無くして」より「無く」の方がよい。総じて、この不一致箇所は頂妙寺版が、文段経を訂正した趣である。

4. 4. 3 文段経にあって頂妙寺版にない箇所

42箇所ある。一々全部挙げる必要もないと思うので、類型毎に掲げる。

中ナカ	①振り仮名	佛耆闍崛山ノ中ニ住シ <small>フ</small> ヒキ	1-2	7例
是(コ、)ニ	②送り仮名	是ココニ於	15-2	6例
曾カテ	③迎え仮名	已ニ曾カ <small>レ</small> テ	13-4	1例
各ノ	④捨て仮名	各ノ若干ソコハクノ百千ノ眷属與ト俱ナリ	7-2	21例
普ノ	⑤助詞	普ノ佛世界	10-3	5例
告 <small>フ</small> (ハク)	⑥敬語	天人衆ニ告 <small>フ</small> ハク	45-3	2例

(行末の例数は、類例の数)

①振り仮名の例が7例、文段経にあって頂妙寺版にないが、殆ど不用な振り仮名である。「中」には頂妙寺版は訓読符がある。あと6例中3例「見」に「ミ」が付いている。「雨」の「アメ」も不用だろう。「所」を「ミモト」と読むのは確かに振り仮名がある方が読みやすいが、これも頂妙寺版は「ミ」という迎え仮名と、「トニ」という捨て仮名と助詞が付いているので読み間違いの危険はない。あと、「欲」に「ホ」とあるのは、送り仮名の「シテ(合字)」と併せ、読みを確定させるが、これもなくとも読み間違ふことはあるまい。

②送り仮名の例、揭示の例はニがある方がいいが無くとも読める。3例「求ル」のルが頂妙寺版にない。1例、「説イテ」とイ音便を示すものが文段経にあるのは注意される。頂妙寺版はテしか送ってない。「汝チ等」のチは頂妙寺版にないが、訓合符が付いていて、読み方に疑問はない。

③迎え仮名の例は一つだけ、頂妙寺版はここにも訓合符がある。

④捨て仮名の例が多い。その全てに頂妙寺版では訓読符が付いている。

⑤助辞の付加が5例ある。揭示例は助詞ノが読み添えられたもの、他の2例はそれぞれ音訓の違いによって生じた例、訓点の付け方の違いによる例。「楽土宮殿臣妾ヲ捨テ、」「念ヲ攝メテ」のテはかえって邪魔である。「是ノ因縁ヲ以テノ故ニ」のテも無くてもよめる。

⑥敬語の例が2例ある。揭示の例は、頂妙寺版に敬語「下(タマフ)」はないが、「告ハク」で「告ゲタマハク」と読むのが通例である。他の1例「佛涅槃ニ入フハント聞上テ」の「上」が文段経にあって頂妙寺版で減少している。明治版でも同様である。「入フハント」に敬語があり、また敬語を重ねるのを避けたものと思われる。

文段経にあるものが頂妙寺版で削られたのであるが、訓読符で補っているのが、25例あり、送り仮名、捨て仮名で補うものもあった。意図的に削って改善したものもあり、この減少が、訓読の質を損ねてはいない。

4. 4. 4 頂妙寺版における増加

全部で245例ある。これについても、類型別に例示して説明する。次の表のように12の種類ある。

内容	頂・増加分	備考	訓 読	所 在	例数
業ッ報処	ッ	入声表記	一切衆生ノ生死ノ業ッ報処ヲ示シテ	42-2	1
令シ(メ _下 フ)	①	振り仮名	佛當ニ為ニ除断シテ盡シテ余有ルコト無ラ令シメ _下 フ	49-4	48
充足シ(フ)	②	送り仮名	佛當ニ法雨ヲ雨シテ道ヲ求ムル者ノニ充足シ _下 フ當シ	49-3	124
未リシ	②⑤	送り+助動詞	佛未 _下 出家シ _下 ハ未リシ時ノ	41-2	2
動シ _下 ハ	②⑥	送り+敬語	身心動シ _下 ハ不ス	10-1	1
住シ _下 ヒキ	②⑥⑤	送り+敬語+助動詞	佛耆耆闍崛山ノ中ニ住シ _下 ヒキ	1-2	1
尋ツ _下 テ	③	迎え仮名	尋ツ _下 テ即是ノ日ニ於テ	45-3	6
者ノ(ニ)	④	捨て仮名	佛當ニ法雨ヲ雨シテ道ヲ求ムル者ノニ充足シ _下 フ當シ	49-3	22
皆	⑤	助動詞	地皆ナ嚴浄ナリ	16-1	25
歎 _下 フ	⑥	敬語	是ノ乗ノ…諸佛ノ歎 _下 フ所ナルヲ得ント願フ	19-3	1
辯才アテ	⑦⑤	語+助詞	衆説辯才アテ	3-4	1
遊ビ	濁点	濁点	多ク族姓ノ家ニ遊ビ	48-1	13

入声表示は1例だけ。中心は、振り仮名の48例、送り仮名の124例、捨て仮名の22例、読み添え助辞（表では「助動詞」）25例及び濁点の付加13例である。ここで、送り仮名と、読み添えの助辞とについて一言断っておく。中にはどちらに分類するか迷うものがあるが、大体次のようにする。送り仮名は、動詞等の活用語尾や、副詞などの一部を送っているのを言う。たとえば、「到リ」のり、「此ノ」「是レ」「當ニ」のノ・レ・ニなどは送り仮名とし、「是（カク）ノ」「諸ノ」「時ニ」のノやニは付加の助詞とする。

特に多いのが送り仮名で、振り仮名とともに、これによって頂妙寺版が間違いなく非常に読みやすくなっていることが知られる。

1. 振り仮名増加の例

「大比丘衆…千人與ト俱ナリキ」の「與ト」2箇所ある。

「周遍セ不_レルコト摩ナシ」の「摩ナシ」これも2箇所ある。振り仮名なしでは読みにくいだろう。

「為コレ（ヲ）」「為ナ（レリ）」「為ナツ（ケン）」は為字訓によるものである。多くは共通するのだが、文段経が付けていないのにも付訓している。「為メテ」は送り仮名の例だが、直前に「為サタメテ」とあるのを受けたものである。

2. 送り仮名増加の例

「爾ノ時ニ」の「爾ノ」13箇所。15箇所ある「爾時」のうち文段経は2箇所だけ送り仮名を付ける。途中の例（9-3、39-4）であり、気まぐれに付けた感じである。頂妙寺版が1箇所だけでなくほとんど全ての箇所のように送り仮名を付けて確実な読み方を示している。同じ文字列に繰り返しこういう仮名を付けるのは、その箇所その箇所で確実に読めることを企図したものと思われる。

「是ノ故ニ當ニ知ル當シ」の「當知（まさに知るべし）」、「當」にニとシを送り、再読文

字であることを確認させている。3箇所ある。

「定慧具足シテ無量ノ論ヘヲ以テ 21-4」、「浄キコト 22-4」の「論へ」「浄キ」など、この送り仮名によって確実に訓読しやすくなっている。この種のものがかかりある。

3. 迎え仮名の例

「故カ(ニ)」「上ミ(へ)」「謂オ(へリ)」「所ミ(ニ)」「尋ツテ」「在ア(テ)」である。「故カ(ニ)」は「カルガユエニ」と読ませようとしたもの、「上ミ(へ)」送り仮名と共に「ミウへ」と読ませるもの、「謂オ(へリ)」は、なれた人には特に必要ないかも知れぬが、「謂」をオモフと読むことを示したものである。その他も、読みを確実にする働きを持つ。

4. 捨て仮名の例

「一ト時キ」「皆ナ」「上ヘ(ニ)」など、「一時」を音読しないように、「皆」は捨て仮名2箇所、1箇所は訓読符がある。「上ヘ」は「上」をカミと読まず、ウへと読むことを示す的確な指示である。

5. 助辞の付加

助詞が単独で増えているのが21所、助動詞単独4箇所、送り仮名、敬語、読み添え語とともに助詞・助動詞が付加されているのが、4箇所ある。

「常ニ諸仏ニ称歎セ所ル、コトヲ為エ」の中の「諸仏ニ」のニ、「諸ノ善男子」のノ、「如意迦楼羅王ナリ」のナリなどで、訓読のためには必要なものである。さらに、「未タ出家シテハ未サリシ時キ」の再読文字「未」に対してサリシと振り仮名と助動詞の付加が見られる。

6. 濁点

文段経には1例も見られないものである。13箇所に見られる。

散ジ2 安ジテ 講ジ 故ゾ 應ゼル3 領ズ 動ゼ 一タビ 行ジ
遊ビ

である。

4. 5 為字訓

23箇所に為字訓がある。これは序品の為字の全てである。作2、是2、定3、得1、名1、以2、與12である。この内、以訓、與訓の場合は全て「ニ」が送ってあるだけで両者一致している。作訓の場合、1例は共通して「ス」が送ってある、もう一方の例は、頂妙寺版で「ナレリ」とする。文段経は単に「レリ」。是訓は1例は共通して「コレ」、他の1例は頂妙寺版だけが「コレ」と付訓している。定訓は最初の1例共通して「サタメテ」とし、二番目は頂妙寺版「メテ」、文段経「テ」、三番目はともに「メテ」、いずれも近接しているのでこれでいいのだろう。得訓は頂妙寺版のみ「エ」、名訓は頂妙寺版「ナツケン」、文段経は「ケン」のみだが、その直上に「名」とあるので読みに問題はない。ちなみに、頂妙寺版は、文段経が一々為字訓を

付けているのに対し、和訓化していると思えるのがあること上述の通りだが、為字訓そのものは一例もない。これは、全巻通じて同じである。

5. 小結

以上、本稿は頂妙寺版と文段経の関係を序品についてだけであるが子細に見た。若干の相違は見られるが、総じて文段経を殆ど忠実に受け継ぎ、訓読に関して一層整備している様子が見て取れた。頂妙寺版の目的が、法華経を訓読するためのものだったということがほの見える。頂妙寺版初版において、「今謹んで彼此を合校し、衆本を抜萃し、之を擇び之を輯む」とある「彼此」とは大筋文段法華経であったと言って良からうと思う。

前述の通り、これは、そうでない資料との対照をしないと本当に確実にそうだとは言えないことである。そのことについては、全体についてのデータの整備とともに、両点本との比較について後稿を約束する。

註

- (1) 田島毓堂「頂妙寺版法華経の成立」(『日本・中国における近世の社会と文化』1989 昭和六十一・六十二・六十三年度特定研究費 研究代表者森正夫 pp51-53)
- (2) 拙著『法華経為字和訓の研究』1999
- (3) 注2の拙著の中に、『法華経為為章』の最古写本叡山文庫蔵本の影印を掲げてある。
- (4) 注2の拙著に紹介してあるが、念のためにその影響の著しい古点本の名を挙げれば、「立本寺本妙法蓮華経」「高野山龍光院蔵妙法蓮華経」等である。
- (5) 小林芳規・松本光隆「防府天満宮本妙法蓮華経八巻の訓点」(『内海文化研究紀要 12』1984) 拙稿「新資料・日光山輪王寺天海蔵高麗版法華経における為字和訓」(『訓点語と訓点資料 97』1996)のほか、校正図書館蔵「五山版妙法蓮華経科注」にも為字訓が付されている。
- (6) 拙稿「為字和訓よりみたる法華経訓読」(『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』1984) 注2の拙著所収